

プルタルコス『コリオラヌス伝』

柳 沼 重 剛

I. 序

コリオラヌス、本当の名はガルス(またはグナイウス)・マルキウス。コリオラヌスというのは、コリオリの戦で彼が目覚ましい活躍をしたために頂戴した渾名である。このローマの伝説的な将軍は、いかなる敵に対しても祖国のために勇猛を奮って人々の畏敬を集めたが、一方で彼は過激な貴族派で、そのために平民の煽動家から敵視されてついには永久追放を宣告されるに至る。憤激した彼は祖国を捨て母も妻も子も捨てて敵国に亡命し、そこで将軍となってローマに攻め寄せる。ローマは散々に痛めつけられた果に彼のもとに和解のための使者を遣わすが、彼はすべて追返す。最後に彼の母親が嘆願するに及んで彼もついに折れて軍を退く。所が今度はそれが裏切行為だと亡命先の煽動家に騒がれ、殺されてしまった。

プルタルコス(以下 Plut と記す)にとっては、彼は天性(φύσις)はすぐれて(ἀγαθὰ)いたが、それを教育(παιδεία)で磨くということをしなかったためにこういう悲劇的な生涯を送ることになったのだが¹⁾、Plut の『コリオラヌス伝』(以下 Cor と記す)がハリカルナソスのディオニュシオス(以下 DH と記す)の『ローマ古代史』を主な資料としていることは確かで、それがどれほど確かであるかを示すために、Cor の各章と DH の該当箇所との対照表を作ると次のようになる。一層厳密には下記第 II—IV 章を見て頂きたい。

Cor	DH	Cor	DH
5	6. 22-24	12, 13	7. 1-2, 12-19
6, 7	45-90	15	19, 21. 2
8	92	16	20-24
9	93	17	25-32
10, 11	94	18	33-36

<i>Cor</i>	DH	<i>Cor</i>	DH
19	7. 37-57	29	8. 20-21
20	57-59	30	22-35
21	67	31	57
22	8. 1	32	37
23	1-2	33	39-42
24, 25	7. 68-69	34	44-45
26	8. 2-4, 9-10	35, 36	46-54, 57
27	5-8	37	55
28	13-19	30	57-59

DH は歴史を、Plut は コリオラヌス (以下 *Cor*) の伝記を書いたにしては、Plut が DH と殆ど同じ事柄を殆ど同じ順序に書いていることはむしろ驚くべきであり、Plut が DH と違う点と言えば、彼が DH の記述を相当思切って切詰めたことと見える。しかしこの切詰めのおかげで Plut が書いたのは歴史ではなくて伝記になったのかどうかは検討するに値することで、そこで本稿ではその切詰めあるいは要約の仕方を観察してみようと思う。なお、やはり Plut の *Cor* を扱った D. A. Russell, 'Plutarch's Life of Coriolanus' (*JRS* 53, 1963, 23 ff.) というすぐれた業績があるが、そこで扱われた事項については本稿ではなるべく触れないことにする²⁾。また、*Cor* そのもの、あるいは彼がいた当時のローマの歴史を問題にするのならば、少なくともリウィウスの『ローマ史』第 2 巻第 23—40 章ぐらいは参照しなければならないが、本稿は Plut が主要資料である DH をどう料理したかを見ることを唯一の目的とする故、リウィウスの記事も原則として取上げないことにする。

II. 民衆の叛乱から護民官創設まで

1 *Cor*. 5 は DH 6. 22. 1-2, 23-24, 26. 1-2 の要約である。ここが Plut の伝記の本文の始まりで、これ以前は序に当る。*Cor*. 5. 4 で民衆の叛乱にどう対処するかで貴族がタカ派とハト派に分れ、*Cor* もタカ派の一人として働いているが、DH ではこの段階では *Cor* は登場していない³⁾。要約は概して巧妙に行われているが、時には無理もしていて、例えば *Cor*. 5. 1 の冒頭は「元老院は、金貸しからいろいろひどい目に遇わされていると思っていた民衆と不和になり」と言っているが、いきなりこう言われても事情はつかみにくい。また DH によればこの間に執政官が 1 度代っている、ということは少なくとも 1 年

以上に跨る時の間の出来事だということになるが、Plut の記述だとせいぜい1月ぐらいの時間しかたっていないような感じがする。記述が余り簡単だからである。

2 DH ならば6.25-44という紙数を費す所を Plut は *Cor.* 6 の初めに「この問題に関して元老院はしばしば召集され、何一つ結論に達しなかった」と1行で片付ける。小気味のよい割愛ぶりだが、やはり DH から補っておいた方がよいことがある。元老院が何一つ結論に達しなかったのは上述のタカ派ハト派の対立のためで、概して老年層はハト派、若年層はタカ派だったということ⁴⁾、そして時には老人の説得が効を奏して民衆に何か約束すると、次の機会に若年者の反撥によってそれが覆されるということがたびたびあって、そのために民衆は元老院から約束を反古にされ通しだと不平をいだき、それが貴族と平民の不和を募らせていたということ、などが DH から分る。DH ではここでも *Cor.* は登場しない。

Cor. 6 の主部は民衆がついに叛乱を起して聖山 (sacer mons, *ἱερόν ὄρος*) なる山に立籠る話で、DH なら6.44-86になる。これもかなり大胆な切詰めだが、今度の切詰めは主として、DH の中に含まれている何人かの演説を省いて一人しか演説しなかったことにし、その一人の演説も内容を全部省いて「元老院のためにいろいろ打明けて」などとしたことによっている。ここには *Cor.* は全く現れないので、伝記としてはこういう所はできるだけ簡略にした方がよいと考えたのか。その代り、やがて *Cor.* が登場する時、舞台や背景が DH よりはぼやけて見えることは否めない。貴族派の中ではアッピウスというのが代表的な過激派だとか、ワレリウスというのは常に穏健な理を尽くした発言をする人だとか、平民派ではシキニウスというのが過激なだけでなく頭も良くて、だから元老院や貴族にとっては扱いにくい相手であるとか、その元老院内ではかつて内乱というものを経験したことがあるかないか、あるいは国家を維持して行くのに民衆の力が必要だと認めるか認めないか、などという点がタカ派ハト派の対立の元になっていた、とかいうことは Plut からは分らない。しかしこういう人物が絡み合い、こういう考え方がぶつかり合って事件だの状況だのが出来、今度はその事件や状況に身を処することで人は行動する。それが Plut の記述からは伝わって来ない憾みがある。DH についても苦情を述べるなら、彼の演説はどれも長過ぎる。彼自身もそのことには気付いていて、あとで (7.66) 弁明している⁵⁾。しかしそれでも長過ぎる。——Plut は一つだけ演説の内容を紹介していて、それは元老院から民衆の所へ派遣された使節の一人、メネウ

スがやった譬え話である。胃袋に対して身体の他の部分が叛乱を起したというのである。自分は何もしないで身体の真中に坐っていて、それで食べ物はみな一人で食べてしまう、俺達はこんなに労苦に耐えているのに、と胃袋に向って文句を言った所、胃袋は、私はその食べ物を自分の中からまた送り出して他の者に分けてやっているのだと答えたという。胃袋は勿論元老院である。いかにも Plut 好みの話で、これは省くに忍びなかったのだろう。

3 Cor. 7 は和解が成立して、ローマ史上初めて護民官 (tribuni plebis, δημάρχοι) が誕生するいきさつだが、ここの Plut の記述は簡単過ぎる。DH ではここにも Cor は登場しないのに Plut が、Cor はこんな役人が出来たことを喜ばなかったと書いているのは、この護民官がやがて Cor の運命を左右することになることを慮っての伏線だろうが、DH を読んでみると伏線だけでは大いに不足だと知れる。——事ここに至るまでに元老院は幾たびか平民派に譲歩を重ねて来た。そしてこの頃から上述のシキニウスの他にもう一人、本名ルキウス・ユニウス、しかし本人はプルトゥスと呼ばれたがっていた男がいて⁶⁾、これがこの護民官の件では立役者となる。今の和解に際しても、将来にはまだ不安が残ると食ひ下り、将来に亘る保障がほしいとねばる。保障とは何かと問えば、我々の間から任期一年の役人を出すことだと言う。その役人の任務は、民衆で不正や弾圧を受けた者を救い、正当な権利を奪う者があればそれを黙過しないことだと言う (DH 6. 87)。これに対して元老院はさすがに慎重に振舞い、当然タカ派からの反対もあったが結局はこれを認める (6. 88)。かくて平民をやっと納得させることができたとほっとしていると、プルトゥスが民衆に呼びかけて集会を開き、護民官を神聖にして侵すべからざるものとするという決議をしてしまう (6. 89)。——この護民官の権限の規定は、DH によってもリウィウス (2. 33. 1) によっても余りにも漠然としていて、これがあとで問題になる (下記 10 節参照)。Plut はこういういきさつを全部省いた。これも伝記だからか。

4 Cor. 8-10 はコリオリの戦で、DH では 6. 92-94。Cor の生涯で最も華々しい部分だが、考察は Russell, *op. cit.*, 24 f. に譲って、DH の描写がより写実的であるのに対して、Plut ののはより簡潔で修辭的であり⁷⁾、Cor の勇猛と無欲という点が殊更に強調されている⁸⁾、とだけ言っておく。

III. コリオラスをめぐる貴族と民衆の争

5 *Cor.* 12-13 は、コリオリの戦の後、穀物や物資の不足のために再び情勢が不安になり、煽動家たちが騒ぎ始めたこと。DH 7. 1-2, 12-19 に当る。Plut の記述は簡略だが、ここでは内容的には DH と余り違わない。外国からの穀物の買付けが元老院の思わく通りには運ばなかったことも、ウェリトライから (DH では他の都市からも) 植民の依頼を受けて元老院が、得たり賢しと応じようとして、シキニウスやブルトゥスに反対されたことも、内乱を防ぐためにも外国と戦争を始めようと元老院が企ててこれも反対されたことも、DH から Plut から読める。しかし長過ぎる演説を我慢して読めば、やはり DH の方が目下の状況をよく教えてくれる。——この外征は結局行われた。DH では貴族の有志が、Plut では Cor が、自分の被保護民 (*clientes*, *πέλαται*) と少数の民衆を率いて出陣、Cor が指揮官になった。アンティウムを攻めて忽ち勝ち、夥しい戦利品を得たのを Cor は全部兵たちに分け与えてしまう。すると従軍しなかった民衆が不平を鳴らして、DH によればシキニウスとブルトゥスを、Plut によれば Cor を恨んだ。Cor が恨まれたというのは一見おかしいように見えるがそうではないということはあとで触れる (下記 11 節および第 V 章 D 項)。シキニウスとブルトゥスが恨まれるというのも尤もなことで (なにしろ彼らの言うことを聞いて従軍しなかったおかげで利益にあずかれなかったのだから)、だからこれは DH と Plut の解釈の違い、Plut が DH に加えた変更なのである。

6 *Cor.* 14-15 は Cor が執政官に立候補して落選する条だが、*Cor.* 15. 1-3 が DH 7. 21. 2 と文章まで似ている以外は、全く Plut 独自の記述である。*Cor.* 14. 2 は立候補した Cor が下着を着けずに上衣だけを着て人と会ったこと、実はこういう習慣がローマにあったことの説明で、Plut はこれを *Quest. Rom.* 49 (276 C) でも取上げている。*Cor.* 14. 3-6 は選挙での買収の起源についての考証。こういうことになると Plut は熱心に調べ上げる。*Cor.* 15. 4-5 は、落選した Cor が節度を失ったということから、この伝記の初め 1. 3 でと同じ教訓が繰返される⁹⁾。*Cor.* 15. 6-7 は元老院の若い層が熱烈に Cor を支持したために却て悪い結果を生んだという説明で、これは DH が方々で述べているのと同じことである (註 4 参照)。

7 *Cor.* 16 は穀物が大量にシシリーから到着して、民衆はこれの無料配給を

期待していた所、元老院がこの分配の仕方でもたまたま割れ、挙句に Cor が、穀物を不足ならしめた元凶は民衆なのだから高い料金をとって売れ、護民官などつぶしてしまえと演説する所。DH 7. 22-24 の要約。ただし Plut は DH の記述の中でも肝心な所を一つ省いた。それは、Cor が護民官などつぶしてしまえと叫ぶ時、彼は護民官が、本来虐げられた民衆を救うべきものであるのに、今や元老院や貴族攻撃の具となっている、という判断に立ってのことだった、という一項を省いたことで、このために Cor の演説は響は強いが全く感情的な煽動に聞えるようになった。

8 Cor. 17 は、Cor の演説に憤慨した民衆が彼に釈明を要求するが、Cor がそれに喧嘩ごしで応じたために大騒ぎとなる条。Cor. 17. 3-7 は DH 7. 26-27 の巧妙な要約。17. 8 の「執政官たちは、」というの DH 7. 28-32 のミヌキウスの調停演説に当る。互に対応しないのは残りの部分、Cor. 17. 1-2 と DH 7. 25 であるが、これは DH の、ハト派はなぜハト派なのかという説明を、Plut が全部省いたからである(上記 2 節および註(5)参照)。

9 Cor. 18 は DH 7. 33-36 に当り、それほど大きな違いはないと言ってもよいが、例えば DH 7. 33. 1 に、ミヌキウスの演説を聞いているうちに民衆が彼の言葉遣いの節度と思いやりのある約束に感じ入って鎮まって来たのを見て、シキニウスが腹を立てたという一文があって、Plut がそれを省いたのは重大な相違になるかならないか。腹を立てたシキニウスは Cor にフォルムで弁明をせよと要求する。こうすれば Cor は、弁明どころかまた騒ぎになるようなことを言うだろうと期待したのだが、正にその通りになった。所が今度はシキニウスがやり過ぎて、いきなり Cor を死刑とすると公表したので貴族が騒ぎ出した。この時、裁判もやらずに死刑というのはいけないと諫めたのは、Cor. 18. 5 によれば彼の友人たちであり、DH によればブルトゥスだった。このブルトゥスは誠に諄々と説いている。さらに DH によると、ブルトゥスは大変切れる人物で、道なき所に道を見出すことができた。Cor. 18. 6-7 のシキニウスと貴族の問答、18. 8-9 の Cor に対する彼の要求の言葉は、DH にはない。しかしいかにもありそうなことである。

10 Cor. 19. 1-2 は DH 7. 37-38 の、Cor. 19. 3-4 は DH 7. 47. 2-56 の要約である。演説を省くことによってこれだけ短くなった。しかも短くしたことによって失われたものは殆どない。

問題なのは DH 7. 39-47. 1 というかなりの部分をも Plut が割愛したことで、ここには平民派にデキウスという人物が新たに登場し、これがなかなかの論客

である。そもそもこの *Cor. 19* 全体は、平民派は何とか *Cor* を裁判に引きずり出そう、元老院側はそれを阻止しようとしての互の駆引きを記しているのだから、ここでのデキウスの発言は重要である。彼の主張の要旨は次のようになる。(i) 先に民衆の誰かが弾圧を受けた場合は護民官がそれを民衆に訴えるという法律を元老院も認めたが、今回 *Cor* を訴えるのもその法律に基づくのである (DH. 7. 41, 1)。(ii) 元老院はこの *Cor* 告訴が元老院布告の形をとる必要ありと言っているが、それには当たらない。なぜならそれが必要とされるのは新しい法律を制定する場合であって、今 *Cor* を告訴するのは既成の法律を適用するに過ぎないからである (41. 2-3)。(iii) 我々は法によって認められた権限を行使することを求めているだけであるから、もしそれを認めないのなら国家の分裂を来たすであろう (42) 等々。ここで問題なのは *Plut* がこれを省いた、つまり *Cor* を護民官が告訴することの合法性の問題を省いたことである。貴族と平民の対立は確かに感情的ではあったろうが、自らの勢力を拡張し相手の力を弱めることを図るためには、何を措いてもまずフォルムで議論に打勝つことが必要で、そうなければ感情論では済まされない。現に DH 7. 52 ではアッピウスがこのデキウスの主張を次のように否定している。——弾圧を受けた者を助け、不正を働く者があればそれを黙過しないという 2 項は、確かに法の定める所であるが、それ以外の条項はないので、平民には貴族を裁く権限はない。つまり「助ける」とか「黙過しない」とかいう語 (*βοηθήσουσι καὶ οὐ περιόφονται*) が裁く (*δικάζειν*) ということまで意味しているかどうか。先の和解に際して護民官制度を認めた時、こういう曖昧さが放置されていたのが今改めて問題になって来たのである (上記 3 節)。こういうことは歴史・伝記の区別なしに省くことはできないはずである。

11 *Cor. 20* はハト派のワレリウスの説得によって元老院も *Cor* の裁判に応じたこと。裁判の方法は、民議会において原告・被告の双方がそれぞれに演説をして、その後投票によって有罪・無罪を決める。ただしこの投票の方法にあとで述べるような問題がある (次頁参照)。まず *Cor. 20. 1-2* は DH 7. 57-59. 1 の、20. 3 は DH 7. 59. 2-10 の、20. 4-5 は DH 7. 63. 1-4 の、20. 6-7 は DH 7. 64 の、20. 8 は DH 7. 67. 1 のそれぞれ要約で、特に *Cor. 29. 6-7* と DH 7. 64 は語句までそっくりである。DH 65 は護民官制についての DH の見解、DH 66 は貴族と平民の対立をかくも長々と、演説をいちいち記した理由 (註 5 参照) をそれぞれ述べている所だから、*Plut* がこれを省くのは当然である。すると問題なのは DH 60-62 に当る箇所が *Cor* にはないということだが、その

前に上記 20.1-2, 20.3 についても DH から補っておいた方がよいことがある。そこには裁判前夜のそれぞれの思わくが書いてある。Cor 自身は例の元老院での演説(上記 7 節)が問題にされるだろうと思っていた。所が護民官たちは相談の上、彼が専制君主を目指していると告発することにした。一つには、元老院での発言では勝目はないと彼らが判断した¹⁰⁾のと、さらに次のような点を考慮したからだという。(i) 訴因を特定のある一つのことに限定しない方が得策、(ii) それ自身としては強力でなく、しかも元老院としても認めるわけには行かないような事柄を訴因とした方が得、(iii) 元老院が Cor を助けようにも助けられない立場に Cor を置く。—— Cor も元老院もこの専制君主云々が訴因と聞いてほっとしたということは Plut にも書いてある。

裁判が始まると、投票をケントリア別にするかトリブス別にするかでひとめめた。貴族は前者を主張し、護民官は後者を主張した。ここまでは Plut も書いている。しかし DH 7. 58. はまず、これがローマ人が一人の人間を裁くために行なった最初の集会だったと述べ、次いで、父祖の代以来集会は常に元老院が召集し、議決は常にケントリア別の投票によったものだと教え、さらに 58.3-8 でそのケントリアごとの投票の仕方について説明する。そこでなぜ護民官が伝統的なケントリア別の投票に敢て反対したのかという理由もよく分ることになる¹¹⁾。

Cor. 20.3 でいよいよ裁判が始まるが、Plut はここで、護民官が Cor の元老院での演説の件をやはり持出したとしているが、これまでのいきさつに照らしてこれはおかしい(註 10 参照)。専制君主たらんと窺っているという点に関しては、DH 7. 61. 3 でシキニウスが躍起になって Cor の言動の一つ一つをそこへ結びつけようとするが、これは予想通り彼の思うようには行かなかった。それどころか、Cor や ミヌキウスの演説を聞いているうちに、民衆はこういう人を裁判にかけたことを恥じ入るほどになった¹²⁾。それを見たデキウスが咄嗟に別件を持出す。例のアンティウム攻略の時の戦利品山分け問題である(上記 5 節末尾参照)。ここからあとは Plut も大略を書いている(Cor. 20.5 f.)。戦利品は一切国家に納めるのが法であるのに、Cor がそれを勝手に友人たちに山分けしてしまったのは、彼の専横と傲慢を示す行為である。もし山分けしなかった証拠があるなら提出して貰いたい、と。Cor としては彼一流の気前の良さでやったことで他意はなかった。しかしあれは国家に納めるべきだったと言われればその通りで、無論山分けしなかった証拠などあるはずがない。さすがの Cor も弁明の言葉に詰ってしまった。そしてこの時、従軍しなかった

(これが大多数)おかげで山分けにあずかれなかった連中が騒ぎ立てて、そのまま投票に持って行かれて Cor は敗れた (DH 6. 62. 3-4, 63. 1-4)。Plutによれば Cor は3票差で敗れた。DH によればトリブス総数21、内 Cor を無罪とするもの9だった¹³⁾。この件に関する Plut の結びの言葉は印象的である。「その時身分を見分けるのに服装もその他のしるしも不要だった、喜んでいる人は平民派、悲しんでいる人は貴族派、と立所に分ってしまうのだった。」(Cor. 20. 9) その場の様子が眼に浮かぶようだというわけには行かない。しかし文章は忘れ難く印象に残る¹⁴⁾。

IV. ウォルスキのコリオラヌス

12 Cor. 21 は憤然として Cor が母と妻子を捨てて祖国を後にする条。DH 7. 72. 2-8. 1. 3 に当り、例によって大変な切詰めだが、ここではその上に Plut 自身の付加えもある。Cor. 21. 1 後半—21. 2 がそれで、Cor が永久追放を宣告された時平然としているように思えたのは、決して思慮をめぐらしたからでもなく性温かなためでもなく、彼の心中の苦痛を誰も気づかなかっただけなのだと言ひ、その苦痛が怒に転ずると、人間は活動的に見えるのだと生理学的な解説を加えるのも Plut の流儀である。

13 Cor. 22 は Cor が昨日の敵ウォルスキの将トゥッルスを訪れる条。DH 8. 1. 3 の後半と 8. 1. 4 の後半の敷衍。DH は旧敵に身を委ねる Cor の胸中の不安を書き、Plut はそれを描写する代りに『オデュッセイア』その他からの引用を重ねる。しかし Cor にとっては、その不安よりもローマに対する憎しみの方が強かった。

14 Cor. 23 は Cor とトゥッルスの対面。DH 8. 1. 5-2. 1 に当る。それは夕方だったとか、トゥッルスは食事中であったとか、Cor は頭からすっぽり着物をかぶっていて異様に見えたとか、それでもどことなく威厳があったとかいう描写は、何に基づいたのかは分らないが、Plut にあって DH にはない。こういう描写は伝記向きで非歴史的なのか。Cor の言葉そのものは DH では詠嘆に満ちた嘆願であり、Plut ののは嘆願ではあっても詠嘆などは微塵もなく堂々としている。堂々としている方がこれまでの Cor のイメージと合う。

15 Cor. 24-25 は、Cor に去られた後のローマの不安を象徴する事件(ラティニウスという男の夢)の記述で、大筋に無関係ではないが要するに挿話である。DH 7. 68-69。

16 *Cor.* 26 の前半は、*Cor* とトゥッルスがどうやってローマに戦争を仕掛けるかを談合する条。DH 8. 2. 2-4 の要約である。ただし DH では今すぐにもローマに攻め入ろうと言うトゥッルスを *Cor* が押えて、戦争というものに絶対に受けて立つ形にしなければいけないと説得し、ついでには奸策を用いてこちらから戦を仕掛ける口実になるような事件を起させようと提案する。Plut ではそういう事件が偶然起ったことになっていて、*Cor* は詐術を弄したりしない。Plut は *Cor* をあくまでも堂々とした人間にしておきたかったのだろう。その代り「しかしある人々は...と言っている」という形で DH の説も並記している。

Cor. 26 後半はトゥッルスがローマに送った使者の口上とローマ人の返事。DH 8. 9-10 に当る。例によって DH の文章は真正直である。試みに *Cor.* 26. 5 と DH 8. 10. 3 の末尾とを比べてみるがよい。言っていることは同じでも、文章が違う¹⁵⁾。*Cor* が用語や言い廻しまで DH に似ているというのはむしろ稀で、Plut は DH に依拠しつつも自分の言葉で書いているのである。——かくて準備万端整った時、トゥッルスはウォルスキの全民議會を召集し、この *Cor* はかつては敵として我々に多大の害をなした人間であるが、今は友人として迎えてほしいと言う。

17 *Cor.* 27 はまずその民議会で *Cor* が迎えられ、のみならずトゥッルスと共に將軍に任じられたこと。*Cor* が直ちにローマ領内に攻め入ったこと。ただし貴族の領地には手をつけず、専ら平民の財物を荒したこと。そのために貴族と平民の間にまた軋轢が生じたこと。DH が 8. 5-8 の 4 章も書き連ねたウォルスキ民議会で *Cor* の演説を、Plut は *Cor.* 27. 1 で「*Cor* は武器をとっての戦のみならず舌戦においても、思慮にも胆力にもすぐれていることが分った」と 2 行半にした。以下 *Cor.* 27. 1-2: DH 8. 11-12. 1, *Cor.* 27. 3-4: DH 8. 12. 2, *Cor.* 27. 5-7: DH 8. 12. 3-5+14. 3-4 と対応する。

18 *Cor.* 28 はウォルスキ全軍を二分し、外征軍を *Cor*, 留守部隊をトゥッルスが指揮することにする。*Cor* はラティウム人の諸市を攻める。抵抗せぬ町は攻めないことにする。*Cor.* 28. 1-2: DH 8. 13, *Cor.* 28. 3: DH 8. 14. 1-2, *Cor.* 28. 4-29. 1: DH 8. 15-20 と対応する。

Cor. 27, 28 を通じて、Plut と DH の記事は実によく対応しているが、それだけに両者の文体の違いが目立つ。文の息の長さということから言えば両方共かなり長い方なのに、DH の方が一層長いと感じられるのは、彼の文が往時のアテナイの弁論家を思わせるペリオドスで構成されているのに対して、Plut

の文には関係節が少く、その代り多いのが‘paratactic’につながれた文、分詞構文、同格名詞、対句だということによるのだろう¹⁶⁾。

19 *Cor. 29* は、アイネアス所縁の地ラウィニウムが *Cor* に包囲されるに及んで、護民官が俄かに *Cor* の有罪宣告を取消してローマへ呼び戻すべしとの動議を出したが、元老院がそれを否決したということ。この否決のことは *Cor. 29. 3-5*, *DH* なら *8. 21. 3-5*。ただし否決の理由というのが両者で全く違っている。まず *DH* では、(i) 元老院は自分たちが反対を表明することにより、民衆が一層熱心に *Cor* の帰国を望むようになるだろうと期待して瀬踏みをしてみたのか、あるいは (ii) *Cor* の一切の振舞に関わり合いたくなかった、殊に元老院が *Cor* と結托しているなどと思われたくなかったのか、となる。所が *Plut* だと、(i) 元老院は平民が希望することには何でも反対する気になっていたのか、(ii) 平民の好意によって *Cor* を召喚するというのは困ると思ったのか¹⁷⁾、(iii) ローマの最高の要人たちも苦しんでいるのに、*Cor* 一人ローマの敵と称して勝手な振舞に及んでいるとて怒ったのか、となる。*Plut* と *DH* が同じ事件のことを語りながら、これほどはつきりと違うことを述べている例は実は珍しいのだが、要するに解釈の違いということで、言い換えれば *Plut* は *DH* の解釈が不満だったということである。しかも一目瞭然なのは、*DH* の挙げる理由はいずれも何らかの打算であり、*Plut* の挙げる理由はすべて意地だということである。つまり元老院はこう打算してこの際否決しておこうと判断したと考えたのが *DH* であり、そうではなくて元老院は、意地でもこんな形で *Cor* を呼び戻すわけに行くものかと考えて否決したのだと信じたのが *Plut* である。

なお *Cor* の軍は、*DH* によると例えばポーツラでは苦戦の末に勝っているが、*Plut* は勝ったということしか書かないから、*Cor* は常に無人の野を進軍しているような感じがする。

20 *Cor. 30* は元老院の否決のことを知った *Cor* が激怒して、急速アンティウムの包囲を解いてローマへ向い、市を去る 40 スタディオン、約 7 キロの所に陣を張ったこと。ローマは恐慌に陥り、ために内紛も止み、*Cor* に使者を遣わしたこと(以上 *Cor. 30. 1-6*, *DH 8. 22-28*)。 *Cor. 30. 4-7* で *Plut* が、その使者たちを迎えた *Cor* の尊大な素振りを大いに誇張した後に、「彼らの身分を傷つけない限りで穏やかな情の籠った言葉で使者の趣一部始終を述べ…」というのは、*DH 8. 22-28* のミヌキウスの長い長い帰国勧告の言葉を指している——(以下筆者によるパラフレーズ)「君が怒ったのは無理からぬ所だが、

君の今のやりようは思慮に欠けているぞ。なぜ元老院、あるいは女子供まで敵にするのか。なぜ父祖の墓や神々の官居まで荒すのか。君の勢が盛な今こそ思慮を働かし給え。人間万事塞翁馬だ。それに余り大きくなり過ぎれば神寵も失おう。今やローマは一致して君の帰還を待っている。君が武器をおいてくれさせずればよいのだ。残念ながら、もしどうしても戦は止めぬと言うのなら、我我はもはや内紛も止めた。手強いぞ。神々の御加護もあるぞ。その上、自らを守るために戦う者は侵略者より強いのだ。しかも考えて見給え、負ければ勿論、勝った所で君に残るのは、恥辱と汚名だけではなからうか…。」

Cor. 30. 7-8 は Cor の返事で、「自分が身に受けて来た仕打については手厳しく怒をこめて話し、また 将軍として、戦争でウォルスキから取上げた領地・都市を返還せよ。ラティウム人に対して認めたようにウォルスキに対しても、ローマ人と同等の市民権を与えると決議せよと要求し、同等の正当な権利が与えられるならばともかく、そうでない限りは戦は止めぬと言った。使者たちには協議のため 30 日の猶予を与え、彼らが立去るとすぐにその地方から引揚げた」というのは、DH 8. 29-35 によればこんな内容の言葉だった(筆者によるパラフレーズ)「君たちは今も私の友だ。しかし他の者たちは違う。だからローマ人ととの友誼だ和解だなどとは言わなくてくれ。ローマでは徳に従って国に尽くせば憂目に遇い、過ちを犯した覚えがなくても罰を受ける。私は国のために最善を図ったつもりなのだが、正にそのために罰せられた。私がそういう徳義を重んじたが故に罰せらるべきだと元老院も思ったのか、それともそう思ったのは民衆だけで、元老院は仕方なく従ったのか。もし前者ならば元老院も徳の敵であり、後者ならば元老院は支配能力を持っていないことになる。そんなローマにどうして帰れる。ローマに帰って私にどうしろと言うのだ。民衆に媚びて要職に就けと言うのか、徳を貫いてもう一遍罰しられろと言うのか。今諸君の忠告に従ってウォルスキを捨ててローマに帰ってみろ、それこそ信義に反して神罰を受けねばなるまい。戦を続けるかどうかを決めるのは私ではない。ウォルスキの民議会だ。だが私としての返事も差上げておこう…」あとは Plut と同じである。

21 Cor. 31. 1-4 はトゥッルスが Cor の声望に嫉妬を抱いたという話だが、そのうち Cor. 31. 1-2 に当る部分は DH だとずっとあとのつまり Cor が母親の説得に負けて撤退する所で出て来る。所が Plut では後続の Cor. 31. 3-4 が DH 8. 36. 1 の焼直しであることは明らかだから、Plut は DH のこの 2 箇所が 2 箇所に分れていることが不満だったのである¹⁵⁾。Cor. 31. 5 の、Cor が

ラティウム諸市を荒している間ローマ人は身体がしびれたようになって云々というの DH にはない。

Cor. 31. 6-7 は約束の日が来て Cor が再びローマの使者と会見をする条。DH 8. 36. 3-4。両者共誇りが高く、妥協の余地なく別れる。双方共前回の要求を繰返すのみで終る。

22 Cor. 32 は元老院が、今度は神主や占師などを Cor のもとへ遣わし、しかし前と同じ要求を述べさせてまた不首尾に終る。(Cor. 32. 1-4, DH 8. 37. 2-38. 2)。その時ワレリアという名家の女性に神がのりうつって一つの案を思いつかせた。(Cor. 32. 4 fin-8)。Plut はホメロスからの引用を幾つも重ねて、神々が人間に働きかけて思いも寄らぬことを成就させうるがあるものだというのを熱心に説く。DH は 8. 39. 1 で一言簡単に「何か神からの靈感を受けたように」と言っているだけである。

23 Cor. 33 はそのワレリアが Cor の母親を訪ねて、女たちを引連れて Cor の所へ行って、母親として彼に戦を止めてローマへ戻るように奨めてくれと懇願し、母親もそれを承諾する条。この母親と Cor の妻の名が DH やリウィウスと Plut では食違っているというのは有名だが、説明はつかない。— Cor. 33. 1-3 は DH 8. 39 の要約。次の 33. 4-6 は DH 8. 40 でワレリアの懇願。多少の異同はあるが大したことはない。しかし Cor. 33. 7-10 ではワレリアの願いに母親がいたく感動してすぐさま役目を引受けるが、DH 8. 41-43 の母親はそうではない。Cor に対する国の仕打を語り、別れに際して Cor は、祖国とも家族とも縁を切って出て行ったことを告白し、だから今さらその家族である私たちに何ができましようかと問う。戦を止め、ウォルスキを去ってローマに帰れとは、人の正義に忤り神を穢すことになりはせぬかとも問う。この反問の言葉は痛切な響を持つ。しかしワレリアや、彼女に同行して来た女たちの慟哭の聲の激しさ故についに折れて、役目を引受け、苦勞の末元老院にこの女ばかりの使節団を認めさせる。

24 Cor. 34 は Cor 母子の対面。これは DH 8. 45 に当ると言えば済む。

25 Cor. 35-36 は DH 8. 46-53 で、母親と息子の対話だが、DH では 8.46=母親の語りかけ、8. 47=Cor 母親の言葉を遮って自分の立場を語る、8. 45—53=再び母親の語りかけ、という構成になっているのを、Plut は、Cor. 35=母親の語りかけ、Cor. 36=息子沈黙、母親あらためて語りかけ、という構成にした。特に問題なのは DH で、8. 47 の息子の遮りを境にして、その前と後では母親の言葉がまるで違っているということである。特に、先述の DH 8. 41-

43 の母親は、この「遮り」以後の 8. 48-53 の母親にはすんなりつながるが、「遮り」以前の 8. 46 の母親とはちぐはぐである。あれだけ痛切な言葉をワレリアに向って吐いた母親が、息子に対しては事実上ウォルスキを裏切れと言うに等しいことを、しかもこうあっさりと言うはずがない。しかしそれをあっさり言うものだから、Cor も母親を遮って、先に使者たちに言ったのと同じことを繰り返すことになる。所が息子に遮られた母親は俄かに痛切味を帯びて来て、つまり母親はここで心が変わり気が変わった。しかしそれでもまだ、8. 48-53 の中間の 8. 49-50 ではまた第 1 回の使節ミヌキウスと同じことを繰り返して、また切実さがなくなり、8. 51 からあらためて痛切になる。

そこへ行くと Plut の記述は整理されているばかりでなく、母親は初めから覚悟を決めてここに来ていて、それを貫き通す。この Plut と DH と、どちらの記述がより真相に近いかと言えば、それは DH の方かも知れない。しかし我々を納得させるのは Plut の方である。

DH でも Plut でも、母親は最後に息子の膝下にひれ伏して戦の中止を訴える。驚いた Cor が跳上って、「何をなさるのです、母上」と叫び、「母上の勝です」と軍を退く決意をする。これは Cor. 36. 5, DH 8. 54. 1 である。しかしこれも、Plut だと万感迫り来っての振舞となるが、DH だとそれまでに母親がいろいろなことを言いすぎているので、その分だけ切迫感が薄らぐ。Plut だと息子は終始沈黙していた。その沈黙の重みがこの「母上の勝です」に重なる。ここでも「真相」の如何に拘らず Plut の方に一層の真実を見る。

26 以下 Cor が軍を退き、ローマはそれを大喜びし、ウォルスキは複雑な反応を示す。ただしかねて Cor に嫉妬していたトゥッルスが、この軍の撤退という行動を捉えて騒ぎ立てて、とうとう殺させてしまう。Plut と DH にはそれほど重大な相違はない。ただし Cor. 37. 1 の「ローマの民衆は戦争が終ってからの方が却て、戦争中どんな大きな恐怖と危険の中にあったのかということを感じた」というのは Plut 自身の言葉で、ふとこういう言葉を挿めるのは立派である。所が次の Cor. 38 は、ローマに平和をもたらしたのは女たちの使節だというわけで、「女のための幸運」という神殿を建てた所、そこで神像が女たちに向って語りかけるという不思議な出来事があった、という話に連関して、こるいう不思議なことは科学的には説明できないが、やはり人は神のはたらきというようなものを体験することはあって、それは単に不合理というのとは違うだろうなどと言っている。これは Plut がしばしばやる例の脱線の一つだが、今のこの場所は如何にもこの種の脱線にはふさわしくない。他の場

所でなら楽しむこともできるし、そこから何かを学ぶことはできても、少し向う見ずの所があるにしても一途に生きた武将が、実に悲劇的にあっけなく殺される、その伝記がもう少しで終ろうというこの箇所での脱線は、読む者の腰を折るような拙劣な文章と言わざるを得ない。——Plut の伝記の最後の文はこうである、「ウォルススキの情勢はやがて Cor てを惜しませた…。ローマ軍と戦って敗れ、その時トゥッルスは死に、血気盛りの人々が死に、最も恥ずべき媾和に甘んじてローマの属国となり、ローマ人の命ずる通りにすることを承知した。」

V. 以上の観察のまとめ

本稿の初めに掲げた Plut と DH の対照表からだけでも、Plut が DH を主として要約するという形で利用したらしいことは分るが、実際に当たってみると、この要約はかなり思切ったものであることが分った。そしてこの要約のために DH より却て良くなった例(例えば *Cor.* 37, 上記 26 節)もあるが、要約したために DH よりかなり劣ることになった箇所も多くて、この方が問題である。その主な例として *Cor.* 5 (上記 1 節)、*Cor.* 7 (3 節)、*Cor.* 16 (7 節)、*Cor.* 19 (節末)、*Cor.* 20 (11 節)、*Cor.* 33 (23 節) などが思出せる。これらの要約は多く演説を省くことによっていたのだが(*Cor.* 6, 7, 16, 19, 23)、これは必ずしも演説を省いたのがいけないということではない。なぜなら、演説ではなく記述を省いたために DH より分りにくくなった例もあるし(*Cor.* 5, 6, 7, 18, 19, 20, 33)、演説が省略されていても話の理解にはさほど影響がなかった例(*Cor.* 12, 13, 17, 18, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 34, 35, 36) もあった、というより、実はそういう箇所の方が多かったのである。それ故演説を省いたのがいけないのではなくて、演説にせよ記述にせよおしなべて、Plut の要約の仕方に行けない箇所が幾つかあったということなのである。

そこであらためて、省略したために DH より劣ることになった箇所について、何を省いたためにどういう欠陥が生じたかということをもとめておきたい。

どういう欠陥が生じたかという方は簡単で、一つは当面の情勢、あるいはそこに至るまでの経緯、あるいは周囲の状況等が DH で読むよりつかみにくいということであり、もう一つは、何かを省略したために DH におけるのとは違うものとして人間なり状況なりが映って来るというものである。仮に前者を

A、後者を B とすれば、A は *Cor.* 5 (上記 1 節)、6 (2 節)、7 (3 節)、19 (10 節)、20 (11 節)、30 (20 節) に見られ、B は *Cor.* 16 (7 節)、29 (19 節)、33 (23 節) に見られた。

A について復習をする。*Cor.* 5 では記述全般を簡略にし過ぎて分りにくくなったのであって、特定の何かについて記述を省略したのではない。*Cor.* 30 も同類である。*Cor.* 6 では元老院のタカ派ハト派の対立の記述を省略し、演説全部を省略した。*Cor.* 7 では護民官創設に至るまでの貴族・平民の駆引の全過程を省略した。その権限についての記述も省いた。これでは護民官が何をやるものなのか、平民がなぜこれを強く希望するのが分らない。*Cor.* 19 ではデキウスを省き、当然ながらその演説を省いたので、*Cor.* 裁判の法的根拠をめぐる貴族・平民それぞれの言分が示されないことになった。*Cor.* 20 では裁判を前にしての元老院・護民官それぞれの思わく、特に護民官側のそれを省いたために、護民官のしたたかさが知られなくなった。また投票法についての具体的な説明を止めたので、ケントリア別・トリプス別というのがどれほど切実な問題なのかも知られなくなった。——以上を要約すれば、具体的な政治的状况の一齣一齣、法的手続上の問題等に対する関心の乏しさ、とやうことができる。こういうこと記すのは歴史の任務であって伝記の役目ではないと Plut が考えていたかどうかは俄かに断定できない。しかしその可能性はある¹⁹⁾。

B. *Cor.* 16 は *Cor.* の護民官観を省いたために、彼の演説が全く感情論になり、*Cor.* 33 は、*Cor.* の母親が使節となって息子の所へ赴くことを引受ける時の、いろいろの煩悶をすべて省いたために、彼女があっさりとワレリアの言葉に感動したように見え、そこでその感動が嘘に見え、母親の心が浅く見える。*Cor.* 29 の場合も、*Cor.* が戦に勝ったという結果しか書かないのですべて楽勝のように見える。この点では上の *Cor.* 33 の場合と同じだが、もし読者がそういう印象を得ることを期待して Plut がこういう省略をしたのなら、これは下記 C 項と同類になる。

今度は Plut が DH と違う記述をした箇所を拾ってみる。*Cor.* 8-10 (上記 4 節) は *Cor.* の武勇と無欲と思いを誇張している。*Cor.* 13 (5 節) は民衆から恨まれた人物を護民官でなく *Cor.* だとした。*Cor.* 23 (14 節) は *Cor.* が亡命者としてトゥッルスを訪れた時の長い談話で、DH で詠嘆調で願に及んだ *Cor.* が Plut では胸を張って堂々としている。*Cor.* 26 (16 節)：ローマに戦を仕掛けるために *Cor.* は、DH では詐術を用いるが Plut ではそういう小細工はしない。*Cor.* 29 (19 節)：護民官が出した *Cor.* 召喚の動議を元老院が否決

した理由というのが、DH のはすべて打算に関わり Plut のは意地に関わる。*Cor.* 31 (21 節)・DH がトゥッルススの嫉妬を2箇所に分けていたのを1箇所にまとめた。以上を便宜上 C, D に分けると、C は *Cor.* 8-10, 23, 26。D は *Cor.* 13, 23, 26, 31 で、*Cor.* 29 は C, D いずれでもなく、むしろ前記項 A と関係がある。*Cor.* 23, 26 は C, D いずれでもある。

C は Plut にしばしば見られる筆法で、彼がこれぞ主人公の特徴的性格と見た点を誇張して述べる癖がある、ということの例である²⁰⁾。

D は、*Cor.* の伝記全体を見通して、こうした方が脈絡がつく、人物像の統一が保てる等と Plut が考えて変更したと思しい例で、例えば *Cor.* 13 で、DH のように護民官が恨まれたとすれば分りやすいのに、それを敢て *Cor.* に変えたのは、*Cor.* 20. 5 f. で、*Cor.* やミヌキウスの演説を聞いて、かほどの人を裁判にかけたとは、と自らを恥じるほどになっていた民衆が、デキウスが戦利山分けの一件を持出ただけで忽ち *Cor.* 有罪を叫ぶととうのは解せない。山分けの時に護民官ばかりでなく *Cor.* も相当恨まれたという下地があってこそ、ここは分る²¹⁾。*Cor.* 31 も同断。*Cor.* 23 では詠嘆せず *Cor.* 26 では小細工を弄しない方が廉直な猛将 *Cor.* のイメージによく合う。

Cor. 29 について言えば、DH の挙げる理由がすべて元老院の打算だというのは、DH はこういう事情について考える時まず政治的駆引を念頭に置いたということで、Plut の挙げる理由がみな元老院の意地を表明しているのは、Plut は感情や体面をまず考えたことの現れだと言えそうで、それなら上記 A と関わりがある。

最後に E として、Plut が DH にないものを付加えた例を拾う。*Cor.* 14 の立候補者が下着を着けないことについてと、選挙における買収の起源についての考証、*Cor.* 21 の、追放を宣告された *Cor.* が一見平静に見えたことの説明、*Cor.* 22 では旧敵に身を委ねる *Cor.* の不安を引用を交えて描写した。*Cor.* 32 では、ワレリアが *Cor.* の母親を使節として息子の所に送るという妙案を思いついたことに関して、神々の人間への働きかけの考察、*Cor.* 38 で神像が物を言ったことに連関して迷信と信仰についての議論。——以上は全部同類で、要するに脱線である。もう一箇所、*Cor.* 23 で *Cor.* がトゥッルスを訪れたのが夕方だったはともかくとして、異様ななりをしていた、でも威厳があったなどというのも、Plut 好みの挿話風の描写である。

以上 A—E をまとめてみると、やはり問題なのは C, D, E よりもむしろ

A と **B** つまり省略の方である。そして、伝記ならばこういう点は省略してもよい、あるいは省略すべきだと考えればこそ **Plut** は省略したに違わなくて、そこで分らなくなる。我々の眼から見れば、伝記であれ歴史であれ、**A, B** に挙げたような事柄を省いてしまえば、それは作品に欠陥を生ずるはずだからで、**Plut** はそれを省いた。——前稿で筆者は、**Plut** の主人公の性格の描き方が典型的だと言い、それなら伝記にはならないと言い、然るに **Plut** と言えば古来代表的な伝記作家として通っているのは、恐らく *βίος* というのが我々の「伝記」を直ちに意味しないからではないかと察した²¹⁾。本稿では、**Plut** は主人公を取巻く諸事情 諸情勢の具体的な分析という点に関して筆を省いていて、そのために主人公の行動がそれとの具体的な関連なしに描かれることになってこれが **Plut** の欠陥だと論じたわけだが、さてそれも *βίος* というものが実はそういうものなのとは言えるかどうか。その結論は未だ得ていない。

¹⁾ プルタルコス『コリオラヌス伝』第1章の3。同5も参照。

²⁾ Russell は単に **Plut** と **DH** の対比をでなく、**Plut** の伝記の書き方全体を問題にしている。なお R. Flacelière と É. Chambry の Budé 版 (**PLUTARQUE, Vies, III**, Paris 1964) の解説、脚注、補注も有益である。

³⁾ **DH** を読む限りでは、**Plut** がここで述べているような発言をしきりにしているのは次節で紹介するアッピウスである。それを **Cor** に変えたのは、これが **Cor** の伝記で、しかも **Cor** も対民衆の考え方ではアッピウスと同じだと見たからだろう。**Plut** はアッピウスをただ一度 **Cor. 19. 3** で登場させている。

⁴⁾ **DH 6. 39. 1, 43. 2**; cf. **65 3, 7. 25**。

⁵⁾ 簡単に言うと、ローマの貴族と平民の争は武器を以て相手に強制するのではなく、常に言葉によって説得するという形で行われたからで、**DH** はこれこそローマが最大の諷刺を与えられたべき点だと言っている。

⁶⁾ この男は **DH 6. 70. 1** で初めて登場し、その時は **DH** は彼のことをお笑い種だと評しているが、この護民官問題での活躍ぶりなど見ると、お笑い種どころではない。現に **DH** 自身、あとで紹介するように(下記9節)、彼の有能さを認めている。ブルトゥスと呼ばれたがったのは、彼の名前ルキウス・ユニウスというのが、ローマをタルクィヌスから解放したブルトゥスと同じだったから。彼のことを **DH** は初めは「あのブルトゥスと呼ばれたがっていた男」と呼んでいたが、面倒になったのか、6. 81 以後はブルトゥスと呼んでいる。

⁷⁾ 例えば *οὐ χειρὶ καὶ πλιγγῆ μόνον, ἀλλὰ καὶ τόνου φωνῆς καὶ ὄψεϊ προσώπου φοβερός ἐντυχεῖν πολεμίων καὶ θυσιόστατος* (**Cor. 8. 3**) などというのは正に **Plut** の文で、**DH** ならこの何倍かの文章を用い、*χειρὶ* だの *πλιγγῆ* だのというような与格を使わずに、それを華々しく写實的に描く。なお 8. 5 で **Cor** が兵士を励まして *ἀνεψῆχθαι βωῶν ὑπὸ τῆς τύχης τοῖς δειώκουσι μᾶλλον ἢ τοῖς φεύγουσι τὴν πόλιν* と叫ぶなどというのも、**Plut** 流の誇張を含む簡潔な文章をよく伝えている。**DH** では **Cor** はそんなことを叫ばずに多数の兵と共に門内に雪崩込んでいる。しかし下記 18 節でも言うように

Plut の文章には関係節は少く、‘parataxis’が多いから、概して冗舌調になりがちで、彼が簡潔になるのは、例えばどういふ風に雄弁であったかを描写する代りに「言葉の戦において秀でて」と書き、多くの場合「武器をとっての戦にもすぐれ」というように対句をなしている場合である。

⁹⁾ Russell, *op. cit.*, 24 f. が手際よく指摘している。

¹⁰⁾ 「序」で述べた「φύσις はすぐれていても παιδεία を欠くと悪しき方向にも秀でてしまう」ということ。DH は、プルタルコスについての評言でもそうだったように、Cor についての評言でも後先で互に矛盾することを言っている。彼にとっても Cor は抑制が欠けた人物だったはずなのに、6.92 で初めて Cor を読者に紹介する時には「日々の生活においても σώφρων で」などと言っている。

¹¹⁾ すでに裁判が始まってからだが、元老院のミスキウスが「Cor が元老院で言ったと諸君が訴えている失言は、元老院はその件については彼を放免すべしと決定している故、あらためてそれに言及し、あるいはそれを訴因とすることができないよう」と注意し (DH 7.61.2)、7.63.1 ではデキウスもそれを不承不承ながら認めて別件を出している。

¹²⁾ ケントリア別かトリプス別かは元老院と護民官の駆引の問題だが、伝統的だったのはケントリア別だったのに、結局護民官の主張するトリプス別が辛うじてにせよ勝ったのは、DH によれば (7.59.10)、護民官の方がより正当なことを言っているように思えたからなのだが、なぜそう思えたのか、元老院の連中にもそう思えたのかは書いてない。

¹³⁾ 特に Cor が戦における数々の武勲を述べ、その証人を示し、しまいに肌ぬぎになって戦で受けた沢山の傷を見せたのが効果的だった。それから、専制君主をねらう者が何で民衆を敵とするか。むしろ民衆を抱き込むだろう、という言葉も (DH 8.62.1-3)。

¹⁴⁾ トリプス数が 21 で、Cor 支持票が 9 ならば、彼を有罪とする票は当然 12 で、Plut の 3 票差というのと計算は合う。所が DH は奇妙な計算をして、「だからもう 2 票 Cor 側についたら、同数の場合は無罪という法の決りによって Cor は放免されたはずだ」などと言っている (7.64.6)。これが古来問題になっているが、トリプス総数 21 というのが正しいなら、DH がふとした勘違いをしただけのことである。

¹⁵⁾ οὐδὲν δ' ἔδει τότε πρὸς διάγνωσιν ἐσθῆτος ἢ παρασῆμων ἐτέρων, ἀλλ' εὐθὺς ἦν δῆλος ὅτι δημότης ὁ χαίρων καὶ ὁ δυσφορῶν ὅτι πατριῆκος.

¹⁶⁾ Cor. 26.5: οἱ δὲ Ῥωμαῖοι τῶν πρέσβων ἀκούσαντες ἠγανάκτησαν, καὶ ἀπεκρίναντο προτέρους μὲν ἀναλήψεσθαι τὰ ὄπλα Οὐλοῦσκους, ὑστέρους δὲ καταθήσεσθαι Ῥωμαίους. これは DH が 8.10 全章を使って記したローマ人の返事の末尾をそのまま貰い受けたもので、その部分の DH の文は、ταῦτα Οὐλοῦσκους ἀπαγγέλλετε καὶ λέγετε ὅτι λήφονται μὲν πρότερον τὰ ὄπλα ἐκεῖνοι, θήσομεν δ' ἡμεῖς ὑστεροί.

¹⁷⁾ この他に註 7 で示した特徴を参照。

¹⁸⁾ χάριτι τοῦ δήμου τὸν ἄνδρα μὴ βουλομένη κατέλθειν. Russell, *op. cit.*, 27 はこの χάριτι τοῦ δήμου を ‘in the better interests of the demos’ と解し、従ってこの (ii) 全体は「民衆のためには Cor が帰って来ない方がよいと思った」という意味にとり、こんなことは ‘most implausible’ だと言ひ、‘a highly unlikely degree of altruism’ だと首をかしげている。そして、これは patrici に対して好意的な Plut が、patrici のために最も善意な解釈として考えたものだろうと言っている。しかしそれほど ‘implausible’ で ‘unlikely’ ならば、χάριτι の解釈を改めればよい。それは、χάρων という対格ならば ‘for the sake of’ でも ‘in the better interests of’ でもよいが、χάριτι という与格でもそう解せるか。不可能ではない。しかし稀だろう。

¹⁸⁾ 別の考え方もできる。Cor の行動の順序から言えば、Cor. 31.3-4 は Cor. 30 の末尾 (DH 8.35 末に対応) に連なる。そしてこれに対応する DH の記事は 8.36.1-2 で、その直前は勿論 8.35 の末尾である。だから Cor. 31.1-2 は、そのようにつながっている所へ挿入された部分である。そして DH 8.57.1ff. に対応するのは実は Cor. 39 だと考えれば、Cor. 31.1-2 というのはその DH の記事の一部をここへ移して挿入したものだということになる。つまりあとで実はトゥツルスが、と言う唐突さを避けるために一部をここへ移して伏線となした、と考えられる。そうするとこれも、歴史学としては重大でも伝記としてはどちらでもいいことで、むしろ、どちらの方が話をスムーズに運ぶことができるかという問題になる。なお Russell, *op. cit.*, 25 を参照。

¹⁹⁾ 拙稿「シシリー島のニキアス」(本誌文芸篇・1、筑波大学文芸・言語学系、1977)の全般、しかし特に44頁以下参照。

²⁰⁾ 上掲拙稿45頁以下参照。

²¹⁾ Russell, *op. cit.*, 25 はこの解釈を一つの可能性としては認めているが、'Plutarch has no warrant for his change' と断言している。

²²⁾ 上掲拙稿46頁参照。